

泥谷砂防堰堤群

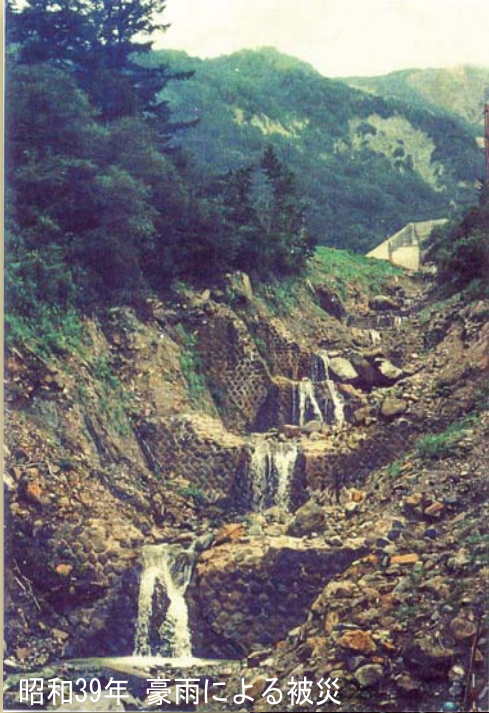
重要文化財 常願寺川砂防施設（泥谷堰堤）



昭和8年 泥谷砂防堰堤群竣工



現在の泥谷砂防堰堤群



昭和39年 豪雨による被災



昭和39年 豪雨による被災

国土交通省 北陸地方整備局 立山砂防事務所

重要文化財 常願寺川砂防施設(泥谷堰堤)

常願寺川砂防施設は、立山連峰から富山湾に注ぐ我が国屈指の急流荒廢河川、常願寺川に築かれた砂防施設である。当初、泥谷には富山県の県営砂防事業による砂防堰堤群が整備されていたが、昭和4年（1929年）の豪雨により泥谷水源地に大崩落が生じ、泥谷一帯の諸工事が破壊・流出、富山県営の泥谷砂防堰堤群は完全に崩壊した。

現在の泥谷堰堤は、富山県からの委託を受けて、内務省が災害復旧事業として整備したものである。

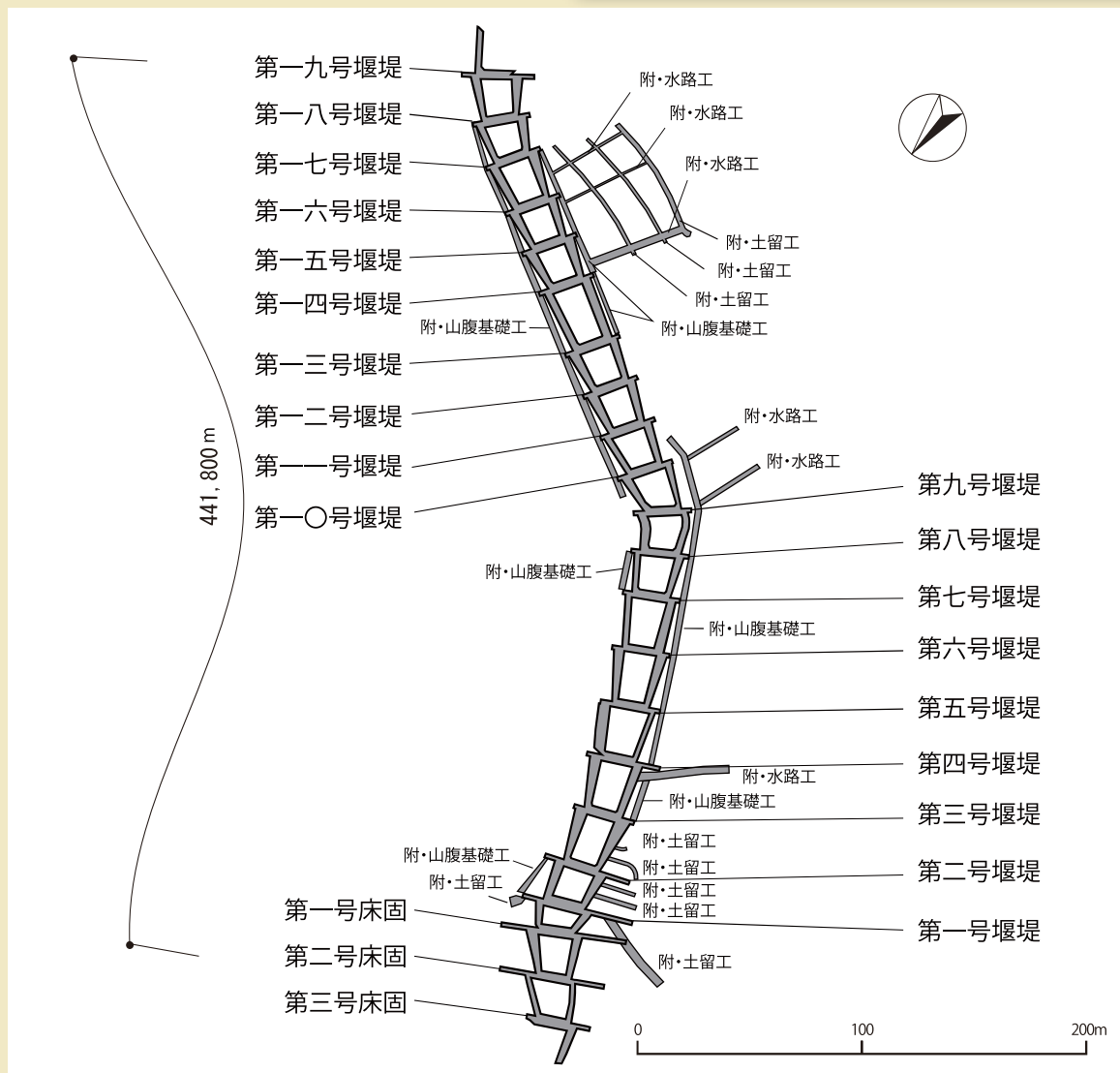
平成14年（2002年）6月に登録有形文化財に登録され、平成29年（2017年）年10月20日に国の文化財審議会の答申を受け、平成29年（2017年）11月28日（告示）により重要文化財に指定された。

【文化審議会答申】

名称：常願寺川砂防施設（泥谷堰堤）
 構成：堰堤一九所[※]、床固三所
 附・山腹基礎工六所、土留工九所、水路工六所
 所在地：富山県富山市有峰字真川谷割
 所有者：国土交通省

（北陸地方整備局立山砂防事務所所管）

指定理由：常願寺川砂防施設は、上流と中流でそれぞれ土砂扞止を担う大規模な基幹砂防堰堤と、水源崩壊地での土砂生産を抑制する支溪の階段式堰堤により、我が国屈指の急流荒廢河川である常願寺川の水系を一体的に治め、その後本格化する水系全体に及ぶ治水対策の礎となった施設であり、我が国治水史上、価値が高い。また、荒廢河川特有の不利な地盤条件を克服して、短期間で完成した大規模な貯砂堰堤と狭溢な谷筋に堰堤が連なる階段式堰堤は、昭和前期における砂防施設の技術的達成度を示すものとして重要である。近代砂防工事の機械施工に係る遺構とともに、崩壊地に面的に整備された山腹工に係る構造物が現存することも貴重であり、指定名称を白岩堰堤砂防施設から常願寺川砂防施設に改め、既指定の白岩堰堤と併せて保存を図る。



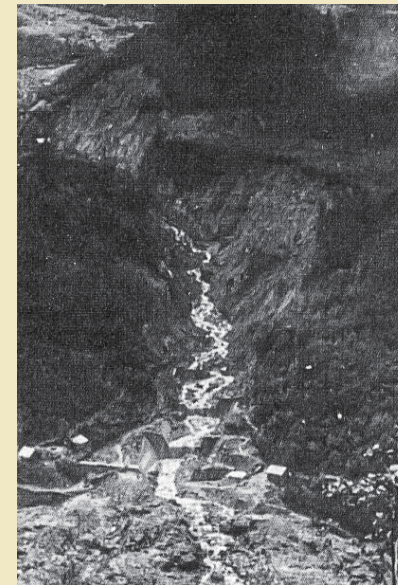
※泥谷砂防堰堤群の堰堤20基のうち、19基が重要文化財に指定された。

和暦	安政5年	明治39年	大正5年	昭和2年	昭和4年	昭和5年	昭和8年	昭和10年	昭和～37年	昭和39年	昭和41年	昭和～42年	昭和59年	昭和62年	平成14年	平成29年
西暦	1858	1906	1916	1927	1929	1930	1933	1935	～1962	1964	1966	～1967	1984	1987	2002	2017
主な出来事	安政の大地震	富山県常願寺川砂防に着手 泥谷砂防堰堤群工事着工	泥谷砂防堰堤群工事竣工	6月16日の豪雨により、泥谷上流右岸側で大崩壊	豪雨により泥谷水源地に大崩壊が生じる	泥谷一帯の堰堤等が破壊され流出する	富山県からの受託工事として、泥谷砂防堰堤群の工事に着手	泥谷砂防堰堤群 竣工 22箇所の階段式堰堤が完成	災害の発生と災害復旧工事を繰り返す	前年の崩壊による泥谷砂防堰堤群の復旧工事を実施される。泥谷のほとんどの堰堤群が被災した。鳶山の崩壊により多枝原平が大量の土砂で埋め尽くされる。	泥谷基幹堰堤 着工	泥谷基幹堰堤 竣工	泥谷砂防堰堤群 登録有形文化財に登録	重要文化財に指定 泥谷砂防堰堤群 常願寺川砂防施設(泥谷堰堤)として		

泥谷砂防堰堤群の整備の変遷

当初、泥谷には富山県の県営砂防事業による砂防堰堤群が整備されていたが、昭和4年(1929年)の豪雨により泥谷水源地に大崩落が生じ、泥谷一帯の諸工事が破壊・流出、富山県営の泥谷砂防堰堤群は完全に崩壊した。

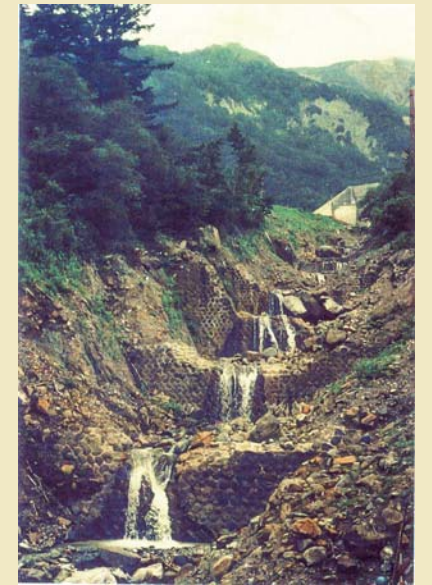
昭和5年(1930年)、富山県から内務省への委託により直轄砂防工事が着手され、昭和8年(1933年)に堰堤22基が竣工した。その後も山腹工事等を行い、最終的に1938年に工事が完了している。



昭和6年(1931年)
富山県施工の
泥谷砂防堰堤群の流出



昭和8年(1933年)
直轄災害復旧工事による
泥谷砂防堰堤群の竣工



昭和39年(1964年)
泥谷中流部泥谷砂防
堰堤群被災状況



昭和39年(1964年)泥谷砂防堰堤群被災状況



昭和41年(1966年)災害復旧工事状況

泥谷砂防堰堤群の補修・補強

直轄砂防事業により整備された現在の泥谷砂防堰堤群は、昭和8年(1933年)の竣工後、度重なる土石流等により破損しており、複数回に亘って補修されている。

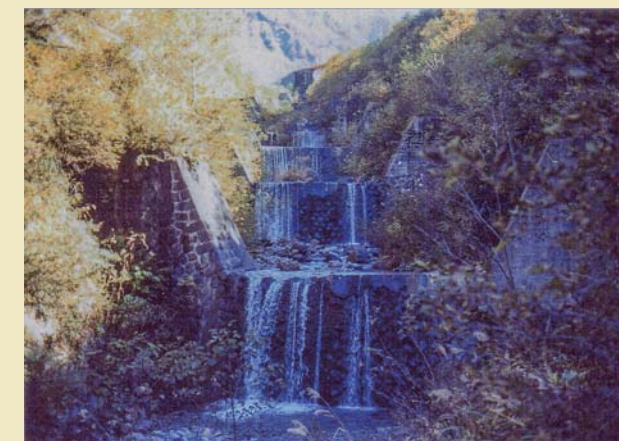
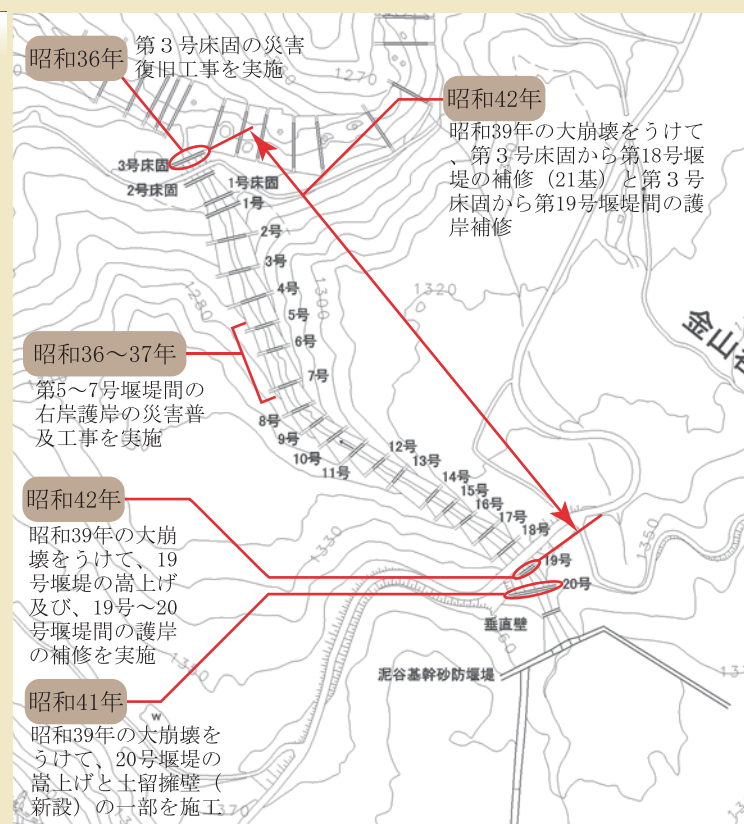
竣工後の最も大きな災害は、昭和39年(1964年)7月中旬に発生した豪雨によるもので、これにより約290万m³の大崩壊が発生した。

このため、ほとんどの堰堤群の袖部と水通天端及び取り付け護岸の一部が破損した。

災害復旧工事では、土石流をスムーズに流下させるため堰堤の袖部は、袖部先端まで護岸工をすりつける構造とした。

また、既設の第21号・22号堰堤は、土石流により埋没したため第20号堰堤を基幹施設と位置づけて嵩上げを行った。

詳細な記録が残っている昭和36年(1961年)以降の補修・補強の履歴を右図に示す。

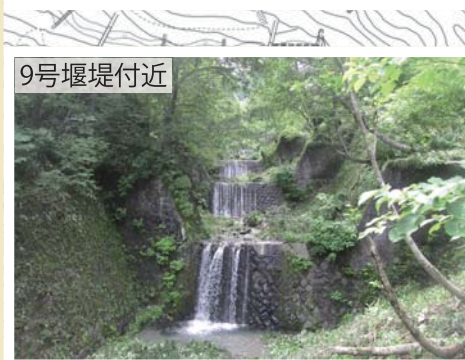


昭和54年(1979年)時点の
泥谷砂防堰堤群の状況



現在の泥谷砂防堰堤群の状況

泥谷砂防堰堤群 平面図



護天涯とは

天涯を護ると彫った碑文は浜田知事（富山県第14第知事）の揮毫と推定されるものであり、初めは大正4年（1915年）ころに彫り込まれたものといわれている。その後の出水で堰堤が流され行方不明になっていたが、昭和5年（1930年）の洪水後に発見されて泥谷第1号堰堤に設置されている。

護天涯の三文字には、いつの時代にも災害のない暮らしを希求する人々の想いが込められている。

復元された緑

下の写真は、富山県が施工した堰堤群の被災直後（昭和4年（1929年））と、災害復旧として国の直轄工事で作られた、泥谷砂防堰堤群の完成直後（昭和8年（1933年））、及び現在の状況とを比較したものである。

これによると、砂防堰堤群の完成により溪岸山腹や溪床が安定し、現在では深く樹林に覆われている状況がみられ、泥谷砂防堰堤群による緑の復元効果が現れていると考えられる。



富山県施工堰堤群被災直後
（昭和4年（1929年））



泥谷砂防堰堤群完成直後
（昭和8年（1933年））



現在の状況

保存管理の基本的な考え方

泥谷砂防堰堤群は、常願寺川支川湯川の源頭部の土石流及び山腹崩壊を防止する目的で建設された、極めて重要な現役の防災施設であることから、防災施設としての機能を確実に保持することを最優先とした上で、重要文化財としての価値も損ねることがないように施設の特徴を踏まえた管理に努めるものとし、保存管理に際しての基本的な考え方を以下のとおり定める。

泥谷砂防堰堤群の保存管理の基本的な考え方

1. 防災機能の保持を第一とする
2. 極力原形を保持する
3. 構造・材料に着目した区分での保存を行う
4. 対応の迅速化、簡素化を行う

泥谷砂防堰堤群の諸元

所在地	富山県富山市有峰字真川谷割
河川名	常願寺川水系湯川泥谷
工事 年月日	着工 昭和5年（1930年）9月1日
	竣工 昭和8年（1933年）9月25日
起業者	内務省新潟土木出張所 立山砂防事務所 （富山県委託工事）

高さ	4.5～16.0m
長さ	24.0～54.5m
総延長	467m
立積	28,804m ³
標高差	122m
型式及び基数	重力式粗石コンクリート堰堤20基※ および床固3基

※重要文化財指定は19基



泥谷砂防堰堤群位置図



国土交通省北陸地方整備局

立山砂防事務所

〒930-1405 富山県中新川郡立山町芦峯寺ブナ坂61（千寿ヶ原）

TEL：076-482-1111 FAX：076-482-1101

ホームページ <http://www.hrr.mlit.go.jp/tateyama/>

E-mail info@tateyamasabo.go.jp

水谷出張所

〒930-1406 富山県中新川郡立山町芦峯寺字松尾（水谷）

TEL：076-482-1133（夏期）